

2007 年 ICU 夏期日本語教育 教務報告

教務主任
小川 貴士

1. 日程

a. 夏期日本語教育開始までのスケジュール

2006 年	11 月	夏期日本語教育講師募集開始
2007 年	1 月	講師選考開始
	2 月	講師依頼開始
	3 月	受講生願書〆切 選考開始
	4 月	ラボ助手、教務助手、文化プログラム助手の募集と選考 受講生への合格通知の発送 セクション数、講師のコース担当（仮）を決定
	5 月	講師に担当コースを連絡、使用教科書とシラバスの送付 会話ボランティア募集開始（新入生リトリートなどで） 学生サービスグループと打ち合わせ 総合学習センターと打ち合わせ カリフォルニア大学東京スタディーセンターと打ち合わせ 図書館と打ち合わせ
	6 月	ホストファミリー説明会（食堂イーストルーム） ラボ助手オリエンテーション（ILC、図書館） プレイスメントテスト（PT）準備（JLP とともに）
	7 月	講師室・教材作成室設営（ラボ助手、教務助手、ILC 関係者） PT 受験室設営

b. 夏期日本語教育期間中のスケジュール

2007 年	7 月 4 日	ヘッド会議 全体講師会
	6 日	PT 実施 歓迎会（食堂において） レベル判定会議
	9 日	PT 結果発表 授業開始 凡人社テキスト販売（本館 2 階中央ラウンジにて）
	11 日	コース変更最終日

全体講師会

12 日 講師懇親会（アラムナイハウスにて）

18 日 全体講師会

25 日 全体講師会

8 月 1 日 全体講師会

3 日 講師懇親会（吉祥寺にて）

8 日 全体講師会

15 日 全体講師会、図書返却

16 日 図書カード返却

17 日 コース最終日、歓送会（食堂において）

c. 夏期日本語教育後のスケジュール

2007 年 8 月 31 日 コース報告書提出〆切

9 月 4 日 受講生に修了証の発送

10 月 16 日 2007 年度夏期日本語教育報告会・反省会

10 月 31 日 『ICU 日本語教育研究 4』 研究論文投稿〆切（12 月 5 日まで延長された）

2. コースについて

a. 授業時間

授業時間は従来どおり、1 コマを 70 分とし週 5 日 1 日 3 コマであり、合計で 6 週間 90 コマ（105 時間）の授業を行った。時間は以下のとおりである。

1 限	8:40-9:50
2 限	10:10-11:20
3 限	11:30-12:40
昼休み	60 分
個別指導	13:40-14:50

b. コース担当講師（敬称略）と学生数

レベル	セクション	責任講師	講師	学生数
C1（初級 1）		永富あゆみ	福富七重 佐藤友美	17
C2（初級 2）	A	小松満帆	津田麻美	15
	B	目黒秋子	河原由祐子	15
C3（初級 3）		西川伊都子	西脇英美 橋本ゆかり	24
C4（中級 1）		濱家優子	畠山衛 平野マリ子	21

C5 (中級 2)		川上麻理	林志野	5
C6 (中級 3)		数野恵理	藤井陽子	7
C7A (上級導入コース)		三上京子	萩原章子	5
C7 (上級)		嘉山郁美	藤崎泰典	7
8 コース		21 名		116 名

c. 使用教材

主教材として、初級 (C1-C3) は『ICU の日本語』、C4 は『日本語中級 J301』、C5 と C6 では『日本語中級 C501』、C7A と C7 ではコピー教材と『どんな時にどう使う日本語表現文法 500』を使用した。また、C4-C6 では、J301 と J501 をもとに ICU が作成した漢字教材を使用した。

d. 個別指導

午後の個別指導の時間は、クラスの復習、作文の添削、各学生のニーズに応じたきめ細かい指導が行われた。また、C1 で平仮名カタカナにさらに指導が必要な学生については、日本語教授法修了の教務助手が手伝いとしてサポートした。

3. 受講生

2007 年度の応募者数は 222 名 (一般応募 178 名、プログラム学生 44 名) であった。そのうち、140 名 (プログラム学生 44 名を含む) を合格とした。プログラム学生とは、カリフォルニア大学、ペンシルベニア大学、ポモナ大学からの交換留学生とロータリー財団の平和研究奨学生 (大学院修士課程) の学生である。140 名の合格者のうち、24 名の辞退者が出て、最終的には 116 名が受講した。また、一般応募の近年の特徴として、大学でまとめて応募してくるところも少くない。前年度の受け入れ実績などとも比較しながら、送り手大学が受け入れ人数についてコメントしてくるケースも出ている。また、ICU の春学期から継続して夏期日本語教育を履修する学生も今年度は 3 名いた。2 名は修了後自分の大学に帰国、1 名は ICU の 4 年本科生であった。

4. 助手

今年は、教務助手 (講師のサポート担当) 2 名、ラボ助手 (教材作成室でのサポート、語学ラボでのサポート、機材の手配、図書館コンピュータ室監督) 4 名、文化助手 (文化プログラムの準備と引率) 3 名を配置した。学内サイトで公募し、日本語教授法修了者を含む 20 名ほどの応募者をディレクターと教務主任が面接し、採用した。

5. プレイメントテスト (PT) と学生のコース移動

PT は初日に 3 種類のテスト (聴解テスト、漢字テスト、総合テスト) を行い、学生を各レベルに振り分けた。飛行機の到着の関係で、1 名が別途 PT を受けた。4 時からの判定会議は、

各レベルの学生数に応じた講師の担当の変更もあったため、また、事前の予想とは異なり、C8（主に、帰国日本人学生向け）に該当する学生がおらず、その代わりに「話し方」「聞き方」が上級で、「読み方」「書き方」が中級以下という学生群があり、急遽 C7A（上級導入コース）というレベルを設定したこともあったため、時間を要した。

授業開始日には各レベルで作文テストとインタビューテストを行い、最終的な受講コースを決定した。PT での判定結果と作文・インタビュー後の移動の人数は以下のとおりである。

	C1	C2	C3	C4	C5	C6	C7A	C7	計
判定通り	16	27	22	17	5	5	4	6	102
上から移動	1	3	0	3	0	2	0	NA	9
下から移動	NA	0	2	1	0	0	1	1	5
計	17	30	24	21	5	7	5	7	116

6. 教務及び学習環境

a. 講師室

大学本館 202 号室を使用した。レベル別及びセッション別に長机 2 台を 1 セットとし、9 つの「島」を作った。教務主任用机 1 台、教務助手用机 1 台、教務助手用コンピュータ（PC）およびプリンター各 1 台（教務助手用机とは別の位置に）、電話 2 台、コピー機 1 台、応接セット、冷蔵庫、食器棚、書架、絵カードなどの教材用机を用意した。

部屋の鍵は、教務主任と教務助手が管理し、本館東口の鍵は講師全員に貸し出す方法でスタートしたが、夜や週末に仕事をする講師の方々のために、貸し出し用の部屋の鍵をもう 1 本準備し、金曜の夕方に使用希望のある講師の方に貸し出した。

b. 教材作成室

機材	設置者など
講師用コンピュータ 10 台	総合学習センター
個人コンピュータ用 LAN ポート 7 口	総合学習センター
教室使用用ラップトップ 5 台	総合学習センター
プリンター 1 台	総合学習センター
コピー機 1 台	リース
ビデオデッキとモニター 2 セット	総合学習センター
CD ラジカセ 5 台	JLP からラボ助手が移動
ビデオ教材キャビネット	JLP から移動
オーディオ教材キャビネット	JLP から移動
作業用机（長机 3 台）	他教室より管財グループが移動
ラボ助手用机（長机 1 台）	他教室より管財グループが移動
ラボ助手用コンピュータ 1 台	総合学習センター

コンピュータの設置に加え、今年は初めて LAN ポートも準備した。当初、LAN ポートについては、202 号室（講師室）に直接引く可能性も検討されたが、部屋別の配線の問題や無線の場合でもモデムの設置位置の問題などで、今回は見送られた。講師室としてより大きな部屋を使えば、教材作成室との一体化も可能性がある。また、その方が機材の管理もしやすいかもしれない。

c. 教室

本館東ウイングの 1 階から 3 階まで 12 室を使用した。その他、会話ボランティアの控え室として 201 号室も使用した。また、語学ラボは I-103 と I-104 を使用した。学生のブースにコンピュータがある教室として、I-131 と図書館マルチメディアルームを使用した。今年は大学本館の全教室にプロジェクター機能の設置が完了していたため、発表などの活動もあまり教室の移動をせずに行えた。

d. 自習および IT 環境

受講生がインターネットとワープロを利用するためのコンピュータは、オスマー図書館の 2 階スタディーエリアのものを使用し、ラボ助手 1 名が 1 時から 4 時まで常駐した。プリンターは同エリアにサマーコース受講生用を 1 台確保し、ラボ助手が管理した。なお、例年レポートなどの宿題のプリントアウトで午前中に（ラボ助手がいない時間帯に）オスマーのスタディーエリアを使用する受講生がいたが、こうした提出物のべ切を午後に設定することで今年度は解消された。

e. 視聴覚教材・機材

視聴覚機材の授業のための貸し出しは、教材作成室で講師が各自で行った。機材のうち、オーディオテープレコーダーや CD ラジカセは教材作成室で講師が各自で行った。授業用ラップトップコンピュータ（5 台）は教材作成室でラボ助手が管理し、必要に応じて貸し出した。プロジェクターはすでに全教室に設置済みであった。OHP は ILC の担当スタッフ小島氏（H-169）に依頼し、8 ミリカメラは必要な際にラボ助手が保管場所である I-102 から運んで使用した。

7. 会話ボランティア

例年通り、各コース基本的に 2 回を目処にビジターセッションを行った。小グループの会話という形式や、受講生の発表を聞いて質疑応答に参加するという形式など様々であった。こうした活動のために、ICU の 4 年本科生と一般社会人に会話ボランティアを募り、協力してもらった。一般社会人による会話ボランティアは MISHOP（財団法人三鷹国際交流協会）の日本語教授法コースの受講者である。ボランティアは ICU の学生 85 名、一般社会人 14 名の参加があった。登録、時間割に合わせたボランティアの手配は、教務助手の 1 名が担当した。夏のキャンパスに ICU の学生がいないという環境の中で、こうして学生たちと交流できるのは貴重な時間であり、また、学生とは経験や考え方も異なる社会人の方たちの参加によって、

意見交換に深みが出ることは受講生にとっても大きな刺激であった。

ビジターセッションが入る時間は、基本的に3限目とし、授業終了後に昼食を一緒に取ってもらうなど、授業外での活動・交歓も行われた。

1つ問題として残ったことは、ICUの学生がボランティア登録時に夏の全期間をこの活動のために空けておいたのに、結局数回しか参加の機会がなかったという不満を表す学生がいたことや、逆に、登録してくれたのにもかかわらず、実際には連絡が取れなくなってしまったということである。これは、登録時とビジターセッションスケジュール決定までにかなり時間があるということが原因であるが、よりよい方策を探していきたい。

8. 今後への課題等

- ① 一斉休暇明けまでの4週間サマーコース担当の看護師をお願いした。日々の学生の健康状態にも気を配ってくれ、講師の先生方も健康のことで相談しやすい環境があった。来年度からは、ぜひサマーコース全期間常駐してもらいたい。
- ② サマーコース期間中に地震があり、地震を初めて経験する受講生もいた。避難場所は本館前の芝生ということになっているが、講師、助手、スタッフに避難誘導の手順についても知らせておく必要がある。
- ③ サマーコース開始前のC8の設定については、受講希望者の教育背景などを考慮して行われているが、いまだに不安定なところがあり、さらなる検討が必要である。
- ④ ③に関連して、今回作られたC7A（上級導入コース）の対象学生は、「話し方」「聞き方」が上級で、「読み方」「書き方」が中級以下というケースだったが、こういうグループの学生にどう対処していくかもさらに議論が必要である。
- ⑤ 言語プログラムと文化プログラムの有機的な結び付きについて、参加した文化プログラム活動を一部クラス内容に反映させるということだけではなく、言語プログラムでの試験日の設定と文化プログラムのスケジュールなど、より総合的な観点から考えていく必要がある。
- ⑥ できれば、春の早い時期から、講師の先生方とのやりとりを進め、スケジュールを早目に準備しておくほうがよりスムーズなスタートとなるであろう。